巻頭
インタビュー

この時代に「寛容」であるということ

国際基督教大学教授　森本あんり

［編集部］
「陰謀論」をご存じでしょうか。「○○が○○なのは裏で○○が○○しているからだ」という都市伝説のようなものです。近年、日本でも徐々に広まりを見せ、社会の分断が危惧されています。昨年1月にアメリカで起きた議会襲撃事件も、その発端は「陰謀論」でした。民主主義を危機的状況に追い込むほどの陰謀論が渦巻く世界を、私たちはどう生きればよいのでしょうか。また「教育」には「陰謀論」を打破することが求められていますが、はたして可能なのでしょうか。その鍵は実は「寛容」にあると、神学者の森本あんり先生はおっしゃいます。お話をうかがいました。

「陰謀論」とは何か

▼「陰謀論」の本場・アメリカ

――アメリカの議会襲撃事件の背景には、「Qアノン」という陰謀論があると指摘されています。なぜ、アメリカで「陰謀論」がこれほど影響力を持っているのでしょうか。

あの事件は全世界を震撼させましたね。議会制民主主義のアメリカがここまで陰謀論に浸食されていたのかと、私も深刻な思いを抱いて見ていました。しかし、実はアメリカの陰謀論は最近突然始まったわけではありません。陰謀論は建国当初からあったのです。

18世紀の建国期にはフリーメイソンが政府を陰で操っている、19世紀にはカトリックの国々が移民を大量に送り込んでアメリカを乗っ取ろうとしている、20世紀初頭にはユダヤ人の国際金融資本がアメリカをねらっている等々。アメリカの歴史は陰謀論の歴史です。

アメリカでこれほど陰謀論が叫ばれるのは、偶然が重なった結果ながら、とても豊かな国だからです。広大な領土、豊富な自然資源、肥沃（ひよく）な土地。ですからアメリカ人は、「自分たちは恵まれている」と思っています。だから、その富を世界の人たちがいつもどこかでねらっている、という発想になるのです。

003-007_巻頭_02.indd 3　2021/12/28 8:51

再校

――そのなかでも、最近は経済格差が拡大してきていますね。

60年代頃までは、自動車の組み立て工として毎日地道に働いていればそれなりに豊かな生活ができていたのに、今はできません。富める者はますます富み、そうでない者はますます貧しくなる。「自分は一生懸命働いているのにうまくいかない。それを邪魔している存在があるに違いない」となっていきます。

▼陰謀論は人間の性

ただ、私はこのような「陰謀論」は人間の性（さが）だと思っています。理性の本来的な働きによるものだからです。人間の理性は推論の能力です。半分しか見えないものは、見えている半分から得られる情報で見えない部分をカバーしようと、頭の中で自然にそれを補って全体像をつくり出しますよね。

ですから、不十分な情報しかないときに推論の能力を働かせるというのは、人間にとってごく当たり前のことなのです。情報が少なければ思い込みで補完するところが増えますし、情報が少ないこと自体が、「誰かが隠しているからだ」と、「証拠がないのがよい証拠」という論理になってしまうのです。

人間は、ファクト（事実）だけの世界に生きているわけではありません。ファクトはコンテキスト（文脈）に乗って、はじめて意味をなします。そしてそのコンテキストには、どうしても人間の主観が入ります。「陰謀論」のなかには、「どうしてそんな突拍子もないことを信じられるのか」と思えるものもありますが、それも人間だからこそ起きることです。動物にはそんな能力も危惧もありません。

――まさにコロナ禍は「不十分な情報」ばかりでした。どんなに「科学的なエビデンス」を指摘されても疑ってかかる人がいます。

そうですね。いつ、どこで誰が感染するかわからず、誰もが不条理な状況に置かれていました。これは近代合理主義にとっては耐えがたいことです。自分の人生をコントロールできない状況に置かれると、人は不安になります。そうすると、どうしても「なぜ、自分がこんなことに」と考えざるを得ません。

「陰謀論」と「教育」

▼教育で「陰謀論」は打破できるのか

――「陰謀論」を打破するためには、科学的な知識を教えることが必要だという意見がありますが、どうお考えでしょうか。

教育とは、ある種のインドクトリネーション＝教化です。方向性こそ違いますが、一種の洗脳です。今の社会の常識はこうで、社会で生きていくために必要な知識はこれだと教え込むことが、まずは教育に求められています。

ここまでは、陰謀論と同じ構造です。今の学校教育で子どもに教え込んでいる社会常識や知識は、単にそれが「今は一般的」と信じられているものに過ぎません。その世界の切り取り方が正しいと思っている人が多数派だから、それを子どもに教えているわけです。

でもそれは、どうしても必要なことです。教育の場で教え込まれた知識は、やがて成長すると物事を批判的に考える力の土台となっていきます。最初にこの土台がないことには、批判的に考える力はつきません。教育が陰謀論と最終的に違うのは、批判的に考える力を身につけることを目的としているからです。教え込むだけにとどまっていては、子どもに特定の世界の切り取り方を教え込むだけで、陰謀論と変わりません。

――そうすると、科学リテラシーやネットリテラシーを身につけることで「陰謀論」を防ぐという考え方は、いかがでしょうか。

もちろんそれは必要で有意義でしょうが、限界もあると思います。

かつてオウム真理教に入信して一連の事件を起こした人たちの多くは、優秀な科学者でした。9・11の実行犯も、高等教育を受けた専門職です。ですから、科学的な知識を身につければ批判的な力が身につく、などとは言えないと思います。

現代人に必要なのは、専門知識よりリベラルアーツ（一般教養）です。自分の専門だけに深入りしていると、別分野からの視線を受けることがなくなり、「何かがおかしい」ということに気づけません。おかしいと感じられるには全体的な身体感覚が必要で、そのためには人格教育や倫理教育を含むリベラルアーツの学びが最適です。少なくとも現状、初等中等教育で推奨されるような「特別の教科道徳」が適切だとは思えません。

――「こうだ」と一方的に教え込まれたら、反発する気持ちも起きてしまいます。

そのとおりです。はじめから決まった結論へと誘導されて評価されるのでは、自分で考える力を養うことにはなりません。陰謀論の世界では、過激な考えの持ち主ほど、否定されると誤った信念をさらに深めてしまいます。

▼近代の傲慢

――そうすると、「教育で人間がよくなっていく（賢くなっていく）」という考え方にも、限界があるということでしょうか。

それは教育や知識の捉え方にもよるでしょうね。たとえば歴史の知識は、誰も個人で調べることができません。コロンブスが149２年に大西洋を渡ったと、歴史の教科書には書いてありますが、それが本当かどうかをいちいち自分で調べることはできないでしょう。

つまり、人間の知識というものは、たくさんの人々が積み重ねてきたものの上に成り立っている、ということです。現代人は何でも自分の頭で考えて判断できる、と思い込んでいます。他人の権威を鵜呑みにするのではなく、むしろそういう既存の考えを疑ってかかるべきだ、と教えられます。昨今の「反知性主義※」も、この風潮の一環です。

しかし、私たちはほかの人々からどれだけたくさんのことを教えてもらっているか、ということを知るのも大事な教育だと思います。歴史や伝統に学ぶことは、知的な傲慢を防ぐのにとても役立ちます。

「寛容」であるということ

▼寛容には不寛容が含まれている

――では、「陰謀論」のように明らかに間違っていると思われる考えに直面したとき、私たちはどう対応したらよいのでしょうか。

そこで鍵になるのが「寛容」ですが、私はこの言葉の意味は捉え直しが必要だと考えています。一般に「寛容」と言うと、否定や否認の対極にあると考えられています。でも、これは誤解です。寛容は、是認と否認の真ん中にあって、その両方を含んでいるのです。

たとえばアイスクリームが好きな人は、最初から100％是認しているので、アイスクリームに「寛容」にはなれません。他方で嫌いな人がまったく食べなければ、これは100％否認なので、明らかに「不寛容」です。「寛容」は、アイスクリームが嫌いな人が、嫌いだけど食べるときにだけ成立します。否認しているけど、受け入れる。嫌だけど、認める。

「相手を善と認めなくても、
好きにならなくても
かまわないのです。」

※知性と権力が結びつくことへの反発。

再校

003-007_巻頭_02.indd 4-5 2021/12/28 8:51

再校

だから寛容には、不寛容が含まれているのです。

さて、ここで「寛容な態度を育てる」とは、何を意味するでしょうか。それは、アイスクリームが嫌いな人に「アイスクリームを好きになれ」と強いることではありません。

――学校で「思いやりの心を持とう」「人に優しくしよう」などと言われますが、これは寛容ではないということでしょうか。

それは結構ですが、そのために自分の心を否定してすべて他人に合わせろ、という意味ではないと思います。もしそうだったら、「あなたは自分の考えを否定して別の人格になれ」と言っていることになり、とても不寛容な要求をしていることになってしまいます。

▼「相手を理解する」

――これもよく言われる「相手を理解する」ことについてはいかがでしょうか。

よく恋人や夫婦で「隠し事をしない」ことが理想であるかのように言われますが、人間そういうわけにはいきません。人格を持つということは、秘密を持つということです。相手のすべてを理解し、自分のすべてを理解してほしいと思うのは、100％の是認を求めていることであり、不可能です。本当に愛するということは、相手の理解できないところ、自分は嫌だと思うところも含めて受け入れることでしょう。それが寛容です。

『不寛容論』（新潮選書）で書きましたが、17世紀の神学者であるロジャー・ウィリアムズが、筋金入りの寛容の出発点です。アメリカの先住民は、アメリカ大陸に来たヨーロッパ人の礼拝を見て、何をしているのか全く理解はできないけれども、その行動を尊重します。彼はその先住民の態度に学ぶんですね。

ヨーロッパ人のなかには、人の礼拝中に押しかけて狼藉を働く人たちもいました。それに比べると先住民のほうがよほど文明的である。礼節を持っている。だから、相手が自分と違う考え方を持っていても、最低限の礼節を持って接することの大切さを、彼は親しくしていた先住民から学んだのです。

▼「寛容」を押しつけるのは「不寛容」

東京オリパラ開催前に、組織委員会会長の女性蔑視発言が問題となりました。それから男女平等をめぐって日本の国際順位が低いことも問題視されましたね。確かに男女平等は進めるべきですが、他方でオリンピックには、そのような男女観をまったく持たない国・地域の人々も来るわけです。そしてオリンピックはその人たちも受け入れています。

そういう人たちに、「あなたたちの考えは間違っています。男女平等を認めないのは劣等国です」と言うことは、寛容でしょうか？寛容であることを相手に押しつけることもまた不寛容になるのです。

――相手に「多様性」を求めることが、相手もまた「多様性」の一部であることを認めないことになるのと同じですね。

そういうことです。

▼八百万の国・日本は寛容？

――日本は八百万の神の国＝多神教であり、いろんなものに寛容だと言われてきました。

確かによく聞きますが、統計を見ると、実はそうでもありません。多神教だから寛容なのではなく、多神教の人も、一神教の人も、無神教の人も、多様な考え方の人が一緒にいられることが寛容な社会なのです。

アメリカからは、確かに人々の排外的で不寛容な言動がニュースで流れてきますが、実際に調べてみると、自分の宗教だけが真理だと考えている人は1割しかいません。8割の人は他の宗教にも真実があると認めているのです。どうしてそうなのかというと、家族のなかでも多様な宗教があるからです。親子でも、パートナー同士でも宗教的な背景が違う。ですからそれを受け入れなければ家族が成り立たないし、コミュニティにも入れません。

再校

日本人は、そういう意味ではみなが多神教で均質だったので、異質な他者に出会う機会が乏しく、寛容になる必要もなかったのです。むしろ「無寛容」だったと言うべきでしょう。しかし、この無寛容は容易に不寛容に転換します。ひとたび「異質だ・危険だ」と思えば徹底的に排除します。少しでも受け入れようとすれば、今度はその人が排除されてしまう。

これからイスラム人口が爆発的に増え、日本にも必ず入ってきます。日本人と相当異なる世界観を持つ人々と一緒に暮らしていくためには、寛容への理解を改めねばなりません。

▼最低限の礼節があれば共存できる

寛容は、相手を善と認めなくても、好きにならなくてもかまわないのです。最低限の礼節さえ持っていれば、共存はできます。逆に言うと、私たちにできるのはそこまでです。

内心は変えられませんし、無理に変えるべきでもありません。内心で思うことは、人の自由です。ただ、思ったことを何でも公共の場などで言ってはいけません。人を傷つけないで。人権を守る。それが最低限の礼節だということです。本音と建前は、誰もが違うからです。

心の中と言動が違ってもいいのです。人間である以上、仕方ありません。むしろそこを守ることが、寛容であることなのです。これは学校でもぜひそう教えていただきたいと思います。内心に点数をつけることなどではなく、守るべき礼節を教えることです。

――礼節とは具体的にどんな態度でしょうか。

今は、自分と異なる考えの人と一緒にいることすらできない人が増えていますね。人と人のつながりが、似た考え方をする身内だけになっています。思想が異なる人とのつながりが減っていることが、自分（たち）の信念をさらに踏み固めて頑固にしてしまいます。

ですから、違う信念の人と同じ空間にいて、自分は黙って相手の言葉を聞く時間を持つことが出発点だと思います。お互いに黙っていてもかまいません。波長を合わせる時間、ラポールをつくる時間を持つことです。

先ほども申し上げたように、人間はファクトだけで生きているわけではありません。ファクトに意味を与えるコンテキストが大切なので、そこに影響を与えるきっかけとなり得るのは、人間関係しかありません。

自分のことをわかろうとしてくれていると思えば、人は徐々に心を聞いてゆくでしょう。そういうところから解きほぐすことです。

▼近代教育の難点

近代の教育は「人間は、教育をすればよくなる」という信念のもとにつくられてきました。実は、その信念が不寛容な結果をもたらすこともあります。誰もが「よくなる」ための教育を施されるなら、それでも「よくならない」人は社会から排除・隔離すべきだという思想につながるからです。だから歴史的に見ると、近代ヒューマニズムは、社会的逸脱に対しては中世より不寛容な面があります。

かといって、そういう人たちは教育をせずに放っておけばよいわけではないでしょう。教育という仕事には、どうしても寛容と不寛容の矛盾がついて回ります。これからの大きな論点です。

――まさに「個別最適な学び」に通じるところだと思います。ありがとうございました。

（編集・構成＝編集部）

［プロフィール］
もりもと・あんり

1956年神奈川県生まれ。国際基督教大学、東京神学大学、プリンストン神学大学を修了（Ph.D.）。国際基督教大学教授（哲学・宗教学）、2012年より2020年まで学務副学長。プリンストン神学大学とバークレー連合神学大学で客員教授。2022年４月より東京女子大学学長。近著に『反知性主義』(新潮選書)、『異端の時代』（岩波新書）、『不寛容論』（新潮選書）など。

003-007_巻頭_02.indd 6-7
2021/12/28 8:51